

「はたらき方は私が決める」～人生の航海図は何度でも書き直せる～

中村 洋子（香蘭女子短期大学 保育学科 准教授）

現代社会において、仕事と家庭の両立、そして家庭生活を守りながら就労を継続することは決して容易ではない。人生におけるライフイベントは必ずしも計画通りに進むとは限らず、それまで描き上げていた人生の航海図を何度も書き直さなければならない局面は、誰の身にも起こり得るものである。なかでも、新しく授かった子どもに障害がある場合、その家庭が直面する困難さはより顕著なものとなる。本講演では、障害児の母親の就労における困難さの具体的な事例を中心に据え、予期せぬ現実と直面した人々が、生き方や働き方を自ら選択し、主体性を取り戻していくことの重要性について論じる。

2006年の障害者自立支援法施行以降、障害児・者やその家族を取り巻く社会的な支援環境は著しく変化してきた。しかしながら、依然として障害児家庭の置かれた状況の本質的な困難さは改善されたとは言いがたい。とりわけ、子どもの障害の発覚や誕生を契機として、母親がそれまでのキャリアの中断を余儀なくされるケースは後を絶たない。この「ワーク・ロス（労働損失）」という状況は、単に経済的な損失にとどまらず、家族全体へ二次的影響を及ぼしていく。かつて思い描いていた人生の設計図が崩壊する中で、母親は社会から切り離されたような強い孤立感を抱く。この孤立が生み出す不安定な心の状態は、子どもの発達上の問題に対処するエネルギーを奪うだけでなく、親自身の心身の健康悪化や、家庭全体の経済的な困窮といった、深刻な悪循環を引き起こしていくのである。

特に、親が子どもの障害を実質的に受容し、現実を受け入れるに至るまでの心理的プロセスは極めて過酷である。子どもの僅かな体調変化や突発的な行動によって日々の生活が一転するような、絶え間ない緊張感を伴う育児生活が日常化すると、親の精神は摩耗していく。その結果、周囲の平均的な発達を遂げる親子に対して複雑な嫉妬や羨望の感情を抱いたり、悪気のない周囲からの励ましの言葉さえも素直に受け止められなくなったりする心境が生まれる。こうした孤立無援の状態が続けば、社会からの完全な断絶や産後鬱といった極限状態に転じる可能性も決して低くはない。

このような悲痛な状況を作り出す背景には、多角的な要因が存在している。まず、障がいのある子どもを産んだことに対する母親としての過度な責任感や罪悪感から、わが子の誕生を心から喜べないという心理的葛藤がある。さらに、これまで社会の第一線で働く中で培ってきた「自立心」や、日本特有の「周囲に迷惑をかけてはいけない」という社会的風土が、皮肉にも他者へのSOSを阻む心理的障壁となり、適切なサポートへのアクセスを拒ませてしまう。また、障害児の出産や育児は、社会全体において依然として「個別的な事例」として扱われがちであり、結果として行政や制度の隙間に落ち、家族単位での孤立した解決を迫られる環境が「閉ざされた育児」を加速させている。

そこで本講演では、著者がこのような極限状態の育児を経験する中で、どのように他者を頼る契機を得て、周囲への感謝と円滑なコミュニケーションを取り戻していったかという実体験を報告する。この個人の経験を地平として、医療・福祉・地域という多角的なネットワークが連携し、障害児の親への多様な支援体制を構築する必要性を広く提唱したい。

頼れる人や場所、利用可能な社会資源といった選択肢を自ら多く開拓し、家庭内の困りごとを周囲にオープンに発信していくことは、単なる福祉の利用にとどまらず働く現場における心理的安全性を生み出す第一歩となる。周囲の理解と家族の協力を得て育児や就労に関する懸念事項を一つずつクリアし、新たな挑戦や学びを通じて主体性を再獲得することこそが、自ら選び取ったキャリアへ向かって再び力強く歩み出すための強力な原動力となるのである。

同時に、若い世代の女性職員がキャリアの途上で抱える固有の課題へのアプローチも不可欠である。今まさに暗闇の中で孤立し、つらい思いをしているすべての人々へ、「一人で抱え込まなくていい」「人生の航海図は何度でも書き直せる」という希望のメッセージを届けたい。誰もが「お互いさま」の気持ちで寄り添い、共に生きていける包摂的な社会の構築を目指し、本講演がこれからの社会における生き方や働き方を共に考究する確かな一助となることを切に願う。

<プロフィール>

大学教員として勤務中、ハンディキャップを持つ次女を授かる。預け先が見つからず退職し、看護のような育児に心身共に苦しむ日々を送る。その専業主婦時代の経験を活かし、地域から受けた援助を「恩送り」すべく、2006年に産前・産後・育児期の女性支援ボランティア団体を設立。2012年には発達障がいや多胎児、障害児を育てる親を支える団体を設立した（現在は解散）。2015年4月、12年ぶりに香蘭女子短期大学の常勤教員に復帰し、今年度より学生部長に就任。現在はインクルーシブ教育の視点から体育や運動遊びを考え、共創スポーツをテーマに「未来の運動会」を多様な人々と地域で創る活動を行っている。また、障害のある人の親亡き後の暮らしの選択肢を増やすため、福岡市内に拠点を創る活動も開始。当事者の心に寄り添い、人生の伴走をする「ガイドランナー」として活動中である。